

## 富士フィルムと足柄（1）

私は小田原の栄町の路地裏にあった写真の現像所の2階で生まれました。デジタル写真になじんだみなさんにはわかりにくい話ですが、昔のフィルム写真は、薄いプラスチックのようなものに銀の化合物である感光材を塗ったフィルムに、カメラで写真を撮影し、そのあと暗室の中でそのフィルムに特殊な処理をして、光を通したときに撮影した像が紙に写り込む（焼き付ける）ようにしてプリントしていました。最後に紙に焼き付けた像を固定するために酢酸の溶液を使うので、私の子どもの頃の思い出は、いつも酸っぱい臭いとともにあります。

私の父親はその現像所（伯父が経営するカメラ店の現像所ですが）で、フィルムの現像をしたり、カメラの修理をしたりしていました。ほとんど人と交わらない仕事でしたが、それは父が高校生の時に肺結核にかかり、片側のろっ骨をのこぎりで切り落として肺をつぶす手術を受けて、辛くも命をつないでいるような状態だったので、人混みに出ることを避けるために選んだ仕事だったようです。子どもの頃に父と風呂に入ると、きつく絞ったタオルを渡されて、背中をゴシゴシと擦るように言われましたが、右側が大きく窪んで、延々と針で縫った跡が続く背中、私の脳裏に焼き付いて今も離れません。

私が小学生になる頃は、父もようやく元気になり、カメラを売ったり、写真をお客さんに届けたりするような仕事にかわり、中学の時にはその現像所の2階から引っ越しました。その頃から、父が現像をしていたモノクロの写真からカラー写真を中心とする時代に移り、現像所も暇になってきていたのです。

父の務めるカメラ店は、富士フィルムの足柄工場にも売店を出していたので、子どもの頃に何度か行ったことがあります。広大な敷地に建物がいくつもあり、構内をフォークリフトやおそろいの作業服を着た人が忙しく動いていました。当時の南足柄は町から市になったばかりの頃でしたが、財政は富士フィルムの納める固定資産税などで潤っていて、道路や公共施設の整備が次々と進み、子育てなどの福祉制度なども隣の小田原市より充実していたので、新しく家を建てて住む人が増えて、人口が増加していました。

企業城下町という言葉があります。一つの市や町に一つの大きな企業の工場、本社、関連企業などが集積し、その市や町の政治や経済に大きな影響を与えている地方自治体をそう呼びます。たとえば、延岡市と旭化成、豊田市とトヨタ自動車などが有名です。豊田市などは、もともと挙母（ころも）市だったのが、社名にちなんで豊田市に名前がかわったりしています。

まだ教員になりたての頃に、水俣病について調べるために熊本県の水俣市に行きました。水俣駅を降りると、改札口からまっすぐ太い道がのび、その先にはチッソ（旧：日本窒素肥料株式会社）の水俣工場の正門があって、巨大な工場群がそびえたっていました。関係者の中には、南足柄を富士フィルムの企業城下町だと言われるのを嫌がる人

もいると思いますが、かつての南足柄にはそのような側面もありました。

では、富士フィルムはなぜ南足柄に大きな工場を建設したのでしょうか。先日足柄工場に電話したら、総務担当の植田雅之さんがわざわざ来校して、「富士フィルム 50 年のあゆみ」という本を届けてくれました。(植田さんは富士フィルムに実業団のバレー部があった時代の選手で、とても背の高い方でした。) その本をもとに、足柄工場設立の経過を簡単に書いてみたいと思います。

富士フィルムの前身である大日本セルロイド株式会社が設立されたのは、1919 (大正8) 年のことです。世界史では、第1次世界大戦が終わってパリ講和会議が開催されたり、朝鮮で三・一独立運動が起きたりした年です。

セルロイドというのは、薬品からつくられる合成樹脂の一種で、少し熱すると柔らかくなり加工がしやすいので、メガネやおもちゃなどの日用品にも使われていますが、当時は写真の感光材を塗る材料(支持体)としての利用が注目されていました。大日本セルロイドは、当初コダックという外国のフィルム会社と提携することも考えていたようですが、最終的にすべて国産技術で国産化する道を選び、その生産を行う工場の建設場所を探しました。関東近県の御殿場、三島、八王子、大宮などが候補地となったようです。

1932(昭和7)年6月に、のちに富士フィルムの社長になる春木榮(さかえ)という人が、南足柄村狩野の清左衛門地獄という湧水池をみて興味をもち、さらに周辺の湧水池の水質等を調べた結果、写真工業に最適な水質だとわかったので、会社はここに工場の建設をすることに決定しました。そして、当時の村長や住民と用地買収の話し合いが行われ、狩野、中沼の約10万㎡が工場用地として買収されました。

足柄に工場をつくるのに合わせて、大日本セルロイドは、写真フィルムの製造を行う部門を富士写真フィルム株式会社として独立させました。このあと、国の資金を調達するなど様々な苦労があったようですが、1934(昭和9)年の設立後は、薬品などの原材料を生産する小田原工場をはじめ、関東近県に関連工場を建設し、写真フィルムのメーカーとして確固たる地位を築いていきました。

その後、世界の写真フィルム生産は、アメリカのコダック、ドイツのアグファ、日本の富士フィルムとコニカの寡占状態が長く続き、日本国内の写真フィルムの生産は、2000(平成12)年にピークを迎えます。しかし、その後10年余りで、なんと生産量は半分以上にまで落ち込むのです。富士フィルムはこの「危機」をどう乗り切ったのでしょうか。以下次号。

